

症例 12 老後の不安

- ・ L氏 80才. 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

Lは、かなり前から、捨ててある物や落ちている物を外出のとき拾って帰るようになった。

Lの認知症に最初に気付いたのは近所の人たちである。他家の庭に入り、植え木のつぼみを切り落としたり、近所へ食べかけのパンを土産に持参するなどの行為があったからだ。Lはこれ以上一人暮らしは不可能と近所の人たちから判断された。

我々が往診した時、Lの家のなかには拾い集めてきたゴミや雑誌などが散乱していた。台所には汚れたままの鍋や皿が積み上げられ、異臭を放っていた。Lの着ていた衣類の襟は垢で光っていた。髪の毛はバラバラで、一昔前の浮浪者のようであった。それでもLは私たちの訪問を歓迎し、「来てくれてありがとう」と何度も頭を下げた。お茶を出そうとした。

「一人暮らしですか」と聞くと、「子供がいますが、今仕事にいつていると思います」と答えた。子供と別居していることを忘れていたようであった。

生活歴

Lの夫は大工だった。一人息子が生まれて、間もなく死亡。Lは、工場の組み立て作業現場の賄い婦として住み込みで働いてきた。息子は中学を出ると母親と同じ現場で働くようになった。生活は大変だったが、Lにとってこの時期が一番幸せであったらしく、いつもニコニコしていた。

やがて息子は結婚し、就職先を変えた。嫁の希望でLとは別居した。Lは一人暮らしとなり、相変わらず工事現場で働いていた。息子夫婦も忙しく、母親とは行き来がほとんどなくなった。

年をとるに従い、Lは仕事がきつくなってきた。仕事の量も減らすようになった。工事現場には、Lの他に賄い婦が一名採用された。

Lは、これからの老後の生活を考えると、とても不安であった。

Lは 65 歳のとき退職した。その後、臨時雇いの仕事を繰り返していたが、やがて体力の衰えもあり、仕事をしなくなった。

その後しばらくして、Lは孤独で無気力な生活を続けるようになった。

認知症が進行した。

【経過】

入院後、Lはいつも何かをしていないと落ち着かない。

布団を敷いたり、たたんだりを繰り返していた。床の小さなゴミも拾い集めた。常に仕事を探していた。

「働かないと悪いからね」と、一人でゴミを拾い集めた。

「ありがとう。おかげでとてもきれいになりました」と礼を言うと、嬉しそうに「いいえ、とんでもない」と言いながら、またゴミを拾い始める。

昼食時、「ご飯だから休みましょう」というと、Lはようやく手を休め、「食べていいんですか」と何度も念を押す。食事が終わると深々と頭を下げる。そしてまた一生懸命ゴミを拾い始める。

夫を早く亡くして、生きること、食べること、子供を育てることに精一杯だったLの長い苦しい人生と、明日からの生活への心配がそこには症状となっていた。

【メモ-1】

『ゴミを拾うこと』は『働くこと』・『仕事を持っていること』と同じ意味を持っていた。それは、仕事による収入を期待させ、Lをこれからの生活への不安から救い出す行為となっていた。同時にこの行為は、Lの『存在価値』つまり、まだ働けることを他人だけではなく自分自身にも認めさせることのできる行為でもあった。

【メモ-2】

「子供はいますが、今は仕事に行っていると思います」の返事は、子供が自分と一緒に居てくれることを願っている言葉である。願いが強いほど、願いごとが(思考と感情のなかで)実現するのが、この時期の認知症の症状の特徴である。

入院後のLに息子が面会に来て、「母さん、母さん」と話し掛けてくれたことが、Lの経過を良好とする最大の原因であった。

同時に、『仕事を持って、働いている』と思えたことが、Lを元気づけ、認知症を改善する原因の一つとなった。

【まとめ】

『働けること・仕事を持てること・わずかでも収入があること』は、高齢者に自分の『存在価値』を確認させ、自分自身を安心させ、そして認知症を遠ざける原因となる。

可能であれば、無報酬ではなく、わずかでも良いから「仕事をしておかねを稼いでいる」と高齢者が考えられるようにすることが望ましい。無料奉仕を高齢者にさせるべきではない。

上記のような適切な対応や考え方は、生活史型認知症から高齢者を救うことができる。